

弥惣の死

野村胡堂

—

「親分、何んかこう胸のすくようなことはありませんかね」

ガラツ八の八五郎は薄寒、そうに弥造やぞうを構えたまま、膝小僧で銭形平次の家の木戸を押し開けて、狭い庭先へノソリと立ったのでした。

「胸のすく禁呪まじないなんか知らないよ。尤も腹の減ることならうんと知ってるぜ。幸いお天気が良いから畳を干そうと思ってるんだ。気取ってなんかいずに、尻でも端折って手伝って行くがいい」

「そいつはあやまりますよ、親分」

「馬鹿野郎、箒ほうきへお辞儀なんかしたって、大掃除おおそうじの義理にはならないよ。畳を

あげるのが嫌なら、その手桶へ水でも汲んで来て、雑巾掛の方を手伝いな」

「畳をあげるより、犯人ほしを挙げる口がありませんか、親分」

「仕様のねえ野郎だ。そんなに御用大事に思うなら、俺の代理に鍛冶町の紅屋べにやへ行つてくれ。——俺は怪我や変死に一々立会うのが嫌だから、鎌倉河岸の佐吉親分に任せてあるんだ——」

「鍛冶町の紅屋に何があつたんです？ 親分」

「紅屋の居候のような支配人のような弥惣やそうという男が、ゆうべ土蔵の中で変死したそうだよ。検屍は今日の巳刻よつ（十時）今から行ったら間に合わないことはあるまい」

「それじゃ親分、大掃除よりそっちの方を手伝いますよ」

八五郎は言い捨てて飛び出しました。

×

×

紅屋——と言つても、手広く唐物袋物を商あきなつた店で、柳宮の御用まで勤め、昔は武鑑の隅っこにも載つた家柄ですが、先代の藤兵衛は半歳前に亡なくなり、跡取の藤吉という二十三になるのが、番頭の彦太郎や、自分では支配人と触れ込んで居候上がりの惣弥を後見に、どうやらこうやら商売をつづけているのでした。

その支配人の惣弥が、けさ小僧の定吉が土蔵を開けて見ると、思いも寄らぬ長持の奥——、曾かつてそんな物があるとも知らなかつた石の唐櫃からびつの蓋に首を挟まれて、虫のように死んでいたのです。

ガラツ八の八五郎が行つた時は、一と足違いに検屍が済んで、役人はもう歸つた後。鎌倉河岸の佐吉も帰り仕度をしているところでした。

「お、八五郎兄あにい哥か、少し遅れたが、どうせ大したことじゃないから——。無駄足になつたな、銭形の親分は？」

「大掃除で真つ黒になつていますよ」

「それでよかつたよ。弥惣の死んだのは間違いに決つたし、唐櫃の中の八千両の小判を拝んだだけが役得見たいなものさ。——尤もこちとらのような貧乏人には眼の毒かも知れないが——」

氣の良い佐吉は、そう言つて笑うのです。

「八千両ですつて？」

ガラツ八はさすがに胆きもを潰くだしました。十六文の蕎麦そばを毎晩二つずつ喰くえる身分になりたいと思ひ込んでいる八五郎に取つては、八千両というのは全く夢のような大金です。

「そいつを取出そうと、石の唐櫃の中へ首を入れたところを、突っかい棒はずが外れたから何十貫という蓋が落ちたのさ」

「へエ——」

そう聴いただけでも、何にかガラッ八には容易ならぬものの臭いがあるのでした。

「不断やつとうの心得があるとか、柔術やわらがいけるとか、腕自慢ばかりしていた弥惣だが、石の唐櫃に首を挟まれちゃ一とたまりもないね」

「そいつは後学のために、現場を見たいものですね、佐吉親分」
ガラッ八は押しして頼みました。

「なるほど、そう言われると面倒臭がつていちや済まねえ。幸い現場はそのままにしてあるから、まず死骸から見て行くがいい」

鎌倉河岸の佐吉はガラッ八を案内して、もういちど紅屋の奥へ引返しました。店から住居を抜けると、裏は二た戸前の土蔵と物置があつて、その間に弥惣父子の住んでいる小さい家があります。

「どうして紅屋の先代が、あんな男を店へ入れたか、——死んだ者の悪口をい

うわけじゃねえが、弥惣というのは一と癖も二た癖もある男だったよ」

五十男の佐吉は、平次には幾度も幾度も助けられているので競争意識を離れて、ガラッ八にこう話して聴かせるのでした。

弥惣の家は小体こていながら裕福そうで、紅屋の支配人と言っても恥かしくないものでしたが、検屍が済んで土蔵から死骸を移したばかりなので、上を下への混雑です。

「気の毒だが、銭形の親分ところの八五郎兄哥がちよつと拝んで行きたいと言
うから——」

佐吉が弁解しながら入ると、

「どうぞ、よく御覧下さいまし。私はどうも、親父が怪我あやまや過ちで死んだとは思えません——」

そう言って案内してくれたのは、死んだ弥惣の倅で、二十五になるといふ弥

三郎でした。もとはどんな暮しをしたか判りませんが、商人には向きそうもない肌合いの男で、少し取りのぼせてはいながらも、言うことはひどくキビキビしております。

「あ」

膝行り寄いざって線香をあげて、死骸を覆おおった中きれを取りのけて、物馴れたガラツ八も思わず声を立てました。

「ね、親分さん、あんまり虐むじたらしいじゃありませんか。万一あれが過ちでなかったら、仏は浮かばれません」

弥三郎は側から血走る眼で見上げます。

死骸は全く二た目と見られない無慙むざんなものでした。石の唐櫃もろてへ双手を入れたところを、上から数十貫の蓋に落ちられたのでしよう。首から肩へかけて泥のように砕けているのです。

「気の毒なことだったな。——とところで、ほんの少し訊きたいことがあるが」
ガラツ八は平次仕込みにきり出しました。

「へ、どんなことでも訊いて下さい。親分さん。——私の口から言うに変ですが、親父は石の唐櫃の蓋に挟まれて死ぬなんて、そんな間拔な人間じゃありません」

「や、っ、っ、の心得があつたというじゃないか」
と八五郎。

「自分では目録だと言っていました、少しは法螺ほらがあつたにしても剣術は自慢でしたよ」

弥三郎はそんなことを言うのも少し得意そうでした。

「紅屋とは、どんな引っ掛りがあつたんだ。三年ほど前にこの家へ入ったという話だが」

ガラツ八は問い進みます。

「先代の旦那が若いとき、小夜さよの中山で山賊の手に陥ちて難儀しているところを、私の親父に助けられたとかいう話で、たいそう恩に着ていましたよ。今から三年前、久し振りで江戸へ来て、この店へ訪ねて来ると、恩返しをしたいから、親子二人ともぜひ足を留めるようにと、たつてのお言葉で、とうとうお店の支配をする約束で、ここに住むことになりました」

「土蔵の石の唐櫃からびつに、八千両の金のあることを、お前は知らなかったのか」
八五郎の問いは方向を変えました。

「少しも知りません」

「父親は？」

「そりゃ、店の支配を頼まれたくらいですから、知っていたでしょう」

「ゆうべ家を抜け出して、土蔵へ入ったことをお前は知っていた筈だと思うが」

「気がつきませんでしたよ。部屋が離れている上、私は大寝坊で」
そう言われると、それっきりのことです。

二

問題の土蔵は小さい方の雑用蔵で、そこには穀物や荒荷や、粗末な道具類しか入っておらず、こんな場所に八千両の大金が隠されていようとは、全く思いも寄らぬことでした。

しかも山のように積んだ雑物の奥、筵むしろやら、空箱やらを取除けた跡に、漆喰しっくいで堅め、角材を組んでその上に幅二尺、長さ四尺、高さ三尺ほどの御影石みかげいしの唐櫃——三寸ほどの短い足の付いたのを、社の御手洗鉢みたらしのように据えてあるので、百貫近かろうと思う同じ御影石の蓋は、後の方にはね除けたまま、縁に

附いた血潮までもそのままにしてあつたのです。

覗くと中は幾千枚とも知れぬバラの小判、——その上に二つの千両箱を載せて、土蔵の薄暗い中にも、入口から射す光線を受けて、真新しい山吹色やまぶきいろに光ります。

何んとはなしに寒気がするような情景の中に、八五郎は精いっぱいせいぱいぱいの注意と、柄相応の威厳とで調べを始めました。

「親分さん、御苦労様で——」

若主人の藤吉は役所から帰つたばかりの顔を出します。二十三というにしては、ひどく若々しいのは、大店の懐ろ子だんなに育つて、世間の風にもあまり当らなかつたせいでしょう。弥三郎のような苦味走つた好い男ではありませんが、おつとりして何んとなく好感を持たせる男です。

「こんなところに八千両の大金を隠してあつたのは、誰と誰が知っていなすつ

た」

ガラツ八は始めました。

「亡くなった父親と、私と、それから番頭の彦太郎だけでございます」

「番頭の彦太郎？」

「私でございます」

四十二三の月代さかやきの少し光る男が、若主人藤吉の後ろから憶病らしく小腰を屈めました。小男で、お店者らしい青白さで、どこかへ置き忘れられたような男ですが、商売の道には賢い様子です。

「死んだ弥惣は知らなかったのか」

ガラツ八は突っ込みました。

「知る筈はございません。弥惣は昨今の者ですから」

若主人の藤吉はきっぱりと言いきります。

「いえ、若旦那のお言葉ですが——親父は紅屋の支配人ですから知っていたに違いないと思います。その証拠には——」

「その証拠には？」

八五郎は問い返しました。

「ここへ来て唐櫃を開けたくらいですから、知っていたに違いありません」

そう言えば何んの変哲もありません。

「知っていて、やましいことがないのなら、夜更けにそつと入る筈はないと思
うが——」

八五郎の疑いはその上へ行きました。

「八千両の隠し場所を、人に知られたくなかつたんでしよう」

弥三郎はこともなげに説き破ります。

「提灯があるようだな」

側の空箱の上に置いた小田原提灯を、八五郎は取上げました。提灯は畳んで半分ほども使った蠟燭ろうそくをむき出しにしてありますが、ゆうべ使ったものらしく、まだ蠟の煮える匂いが残っています。そうです。

「これは誰が持って来たんだ」

「大方、ゆうべ弥惣が持ち込んだものでしょう。店の印しるしが入っておりますから」と藤吉。

「けさ死骸を見付けた小僧さん呼んで貰いたいが——」

「へエ——」

番頭の彦太郎が店の方へ行くと、間もなく十三くらいの利発そうな小僧を連れて来ました。

「私でございますよ、親分」

「今朝の様子を詳しく話してくれ。詳しいほど良い」

「へエ——、いつものようにお店から甲府の出店へ送る商売物の荷造をするつもりで、手頃の空箱を捜しにここへ入ろうと思いましたが、不思議なことに、店の奥の柱の釘に掛けてある鍵が見えません」

「どんな鍵だ」

「鉄の大きな鍵ですよ。先の曲った、太い柄の付いた」

「で、どうした」

「滅多にないことですが、仕方がないから若旦那に申上げて、神棚に載せてある、替え鍵を拝借して開けました」

「その替え鍵は滅多に使わないのだな」

「十年に一度使ったり五年に一度使ったり、滅多に持出しません」

若主人の藤吉は答えました。

「近頃は？」

「七八年使わなかつたようです。神棚からおろした時は、大変な埃ほこりで、手が真っ黒になつたくらいですから」

「それから」

八五郎は小僧の定吉うながを促しました。

「替え鍵で開けて入ると、平常使っている鍵は、蔵の中に抛ほうり出してあつて、中の様子が大分變つてるじゃありませんか。おや？　と思ひながら奥へ入つて行くと、空箱むしろや筵むしろを取除けた後に、見たこともない石の唐櫃からびつがあつて、その蓋ふたに挟まれて——」

小僧の定吉はゴクリと固唾を呑みます。

「その蓋に挟まれているのが、すぐ弥惣と判つたのか」

「え、朝っから見えないうつて騒いでいたんですもの。その着物も昼のまんまだ

し」

定吉は賢くも、いろいろのことに気が付くのです。

併しかしたったこれだけのことで、弥惣の死を過失でないとは決められません。

弥惣は何にかの事情で八千両の隠し場所を嗅ぎ出し、夜陰にそつと忍び込んで、天罰的な災難に遇あつたということは、十分に考えられることだったので。それにしても唐櫃の蓋は、一人の力では開けられそうもないほど重いのが、ガラツ八にも解ききれぬ一つの謎でした。

三

鎌倉河岸の佐吉を先頭に、皆んな土蔵の外へゾロゾロと出た時、

「親分さん、——変なものに気が付きませんか」

弥三郎は八五郎の耳に囁くのでした。

「何んだ」

「ちよつと来て見て下さい」

もとの土蔵の中へ引き返すと、弥三郎は後の方にハネのけた唐櫃の蓋の下から、ほんの少しばかりはみ出している品物を指さしているのです。

「何んだ？」

「何んだか解りません。引出して見ましょう」

「よし」

八五郎は手を掛けて引いて見ましたが、石の蓋があまり重かったのと、はみ出している品が、指が二本かかるのが精いっぱいなので、力自慢でもこればかりはどうにもなりません。

「二人でやったら、少しは動くかもわかりませぬね」

「それじゃ呼吸を揃えて動かして見よう。ひの、ふの、み——と」

八五郎と弥三郎と二人の力を併せて、ほんの少しばかり櫃ひつの蓋を動かしたところを、八五郎は足を働かせて器用にその品物を蹴飛ばしました。

「出ましたよ」

「何んだ懐中煙草入じゃないか——金唐革きんからかわの贅沢なものだな。煙管は銀の延のべか、おやおや滅茶滅茶につぶされている。これじゃ煙も通るまいよ。——誰のだい、こいつは？」

「——」

弥三郎は黙り込んでしまいました。

「こいつは誰のだ、知ってるだろう」

「私からは申上げられません」

「何？」

八五郎はちよつと気色ばみましたが、思い直した様子で、そのまま外へ出るとその辺に胡散うさんな顔をして立っている丁稚てっちを捕えて、わけもなく聞き出しました。懐中煙草入は若主人藤吉の自慢の品だったので。ガラッ八の八五郎は、これだけの収獲に満足して、ともかくも親分の銭形平次のところに引揚げました。これ以上の調べは、どうも自分の力に及びそうもないことを、ガラッ八は悉く承知こしじしていたのです。

「お前にしちや上できだよ」

銭形平次は八五郎の報告を聴きながら、すっかり考え込みました。

「これがどんなことになるでしょう、親分。惣弥はやはり過失あやまちで死んだのでしょうか、それにしちや櫃の蓋が重過ぎると思うんですが——」

八五郎は覚束なくも爪を噛みます。

「解っているじゃないか、惣弥は間違ひもなく人に殺されたのさ」

「へエッ」

八五郎は仰天しました。自分が掻き集めて来た材料で、親分の平次はいったい何を見抜いたのでしょう。

「煙草入が落ちていたり、提灯が消えていたり、死んだ弥惣の細工でないことは解りきっているじゃないか」

「？」

「まず提灯のことを考えるがいい。弥惣が持込んだ提灯で外に誰も人がいなかったら、蠟燭ろうそくは翌る日の朝まで灯いているか、でなきや燃え尽している筈だ」

「なーる」

「土蔵の中で蠟燭はひとりで消える筈はないよ。半分も燃え残っているのは、誰か消した証拠だ」

「へッ」

「弥惣がまさか提灯の蠟燭を吹き消して、それから石の唐櫃に首を突っ込んで死ぬ筈はあるまい」

「すると？」

「もう一人、人間がいた筈だ。——弥惣の相棒かも知れない。弥惣が唐櫃の蓋に首を挟はさまれたのを見定めて、逃げ際に灯だけは消して行ったんだろう。どんなにあわてていても、火の用心のことだけは忘れない人間の仕業だ」

「？」

「唐櫃の蓋は一人じゃ開きそうもない。尤も仕掛を考え出せば別だ」

「あの蓋は、一人の力じゃどんなことをしても動きませんよ。下敷になった懐中煙草入を引出すのでさえ二人がかりでやっとでしたよ」

「その煙草入も面白いな」

平次は他のことを考えている様子です。

「弥惣といっしょに土蔵の中へ入ったのは、煙草入の持主の若主人じゃなかったでしょう。弥惣と若主人は仲が悪かったそうですよ」

「いや、そんな筈はあるまい。——若主人が弥惣と相棒になって土蔵の八千両を夜更けに見に行く筈はない」

「弥惣に脅かされて、無理に案内させられたというようなこともあるでしょう」と八五郎。

「脅かされて行ったか、——成程そんなこともあるだろうな。でも、昨夜のは若主人じゃないよ」

「どういうわけです、親分？」

「夜更けに、他所^{よそ}の懐中煙草入を持って、土蔵へ入る人間はないよ」と平次。

「なるほどね」

「だが、そんな重い石の蓋の下にあったのはおかしいな。——けさ小僧が死骸を見付けたのは何刻だ」

「早かったそうですよ。卯刻むつ（六時）少し過ぎ」

「自慢の懐中煙草入を持っている時刻じゃないな」

「すると、どんなことになるでしょう、親分」

「こいつは思ったより奥行が深いよ。もういちど引返して、死んだ弥惣と伴の弥三郎の素性。それから身持。紅屋の先代と弥惣の掛り合い、若主人藤吉と弥三郎の仲が悪くないか。——そんなことをよく聴き込んで来るがいい。俺も少し聴き出して来ることがある」

平次は仕度もそこそこに出かけるのです。

四

それから半日、夕景近くなつてから、銭形平次と八五郎のガラッ八は、紅屋の店先でハタと逢いました。物蔭に八五郎を呼んだ平次は、

「どうだ八」

「みんな解りましたよ」

「どんなことが？」

畳みかけて忙しそうに訊ねます。

「若主人の藤吉と、惣弥の伴の弥三郎が、番頭彦三郎の娘のお筆ふでを張り合つて、若主人の方に札が落ちたことから——」

「そんなこともあるだろうな。それから」

「亡くなった先代の藤兵衛は、惣弥をひどく嫌っていたが、何にかわけがあつて、追い出すことも出来なかつたそうですよ。——惣弥と来たら、酒乱で我俣

で贅沢で手の付けようがなかった——」

「無理もない。あの男は凶状持きょうじょうもちだったんだ。八丁堀と数寄屋橋の間をお百度を踏んでようやく判ったよ。紅屋の主人を助けたというのも、京上りの途中、小夜さよの中山で山賊に取巻かれたのを、弥惣が飛び出して救ったという武者修行の講釈見たいな話だから、最初から細工さいくだったのかも知れないよ」

「そんなことまで親分は知っていたんですか」

ガラツ八は驚きの中にも出し抜かれ気味で、少しばかり不平そうでした。

「二人の調べが合いさえすればそれでいいのさ。それより明るいうちに、もういちど土蔵の中を見せて貰おうか」

平次はガラツ八一人をつれて、土蔵の中に入り込みました。幸い秋の西陽が入口から深々と射し込んで、昼前に八五郎が来た時よりは反かえっているいろいろの細かいところまでよく見えます。

現場は八五郎の報告通り、何の変化もありませんが、平次は一生懸命土蔵の中を探しているうち、とうとう長いのは一尺五寸ほどから短いのは五寸ほどまでの、頑丈な棒を五六本見付けました。多分土蔵の修繕でもした時、木屑きくずが紛まぎれて残ったのでしよう。握り太の棒や二寸角ほどのかなり頑丈な角材の切れ端ですが、その中で一番長い一尺五寸ほどの両端がひどい力でささくれて、一方の端に近いところには、大きな傷が付いている上、反対の端の方には三尺ほどの丈夫な真田紐さなだひもが確かと結えてあったのです。

「八、懐中煙草入はこの蓋の下にあったと言ったな」

「へエ、——二人掛りで引つ張り出すのが精いっぱいでしたよ」

「そいつを一人ではめ込む工夫があるんだ。その煙草入を借りて来てくれ。それから序ついででに力のありそうな男を四人ばかりつれて来てくれ。なるべく店の者でない方がいい」

「へエ、——」

八五郎は飛び出すと、間もなく潰れた煙草入と鎌倉河岸の佐吉とその子分を三人までつれて来ました。

「錢形の、何にかまた嗅ぎ出したのかい」

佐吉はそう言いながらも、他意のない笑顔を見せるような肌合いの男でした。

「変なことがあるんだ。ちよいと手を貸してくんな」

平次もわだかま蟠りのない調子です。

「いいとも」

「懐中煙草入は、場所柄に不似合いな品だと思わないか、佐吉親分は？」

「そう思うよ。だから弥惣が殺されたと聞いても、仲が悪かった若主人を縛る気にならなかつた」

「さすがに佐吉親分だね。——煙草入はこうして石の蓋の下に入れたんだ」

平次は一尺五寸ほどの棒を、石の蓋の彫り窪めた段にかけると、有合せの木片を支点に、グイと押ししました。石の蓋はわけもなく一端を挙げて、懐中煙草入はスルスルと入ります。

「あッ」

「この通りだ。煙草入は若主人を怨む者が、後で差し込んだのさ。その証拠はみんな揃っている。それから、この蓋を唐櫃からびつの上へのせて貫きたいが——」

それは骨の折れる仕事でしたが、力自慢の大の男が六人で、どうやらこうやら石の蓋を唐櫃の上へ載せました。蓋は少しの隙間もなく、ピタリと唐櫃の上に納まって、二人や三人では、一寸も透かせそうもありません。人間が首を突っ込むほど開けるためには、どうしても三四人の力をあわせなければならなかったでしょう。

「これを一人で開けるのが仕掛けだったんだ」

平次は紐ひもの附いた棒を、唐櫃と蓋の間に造った、少しばかりの彫り窪みに当ててグイと押ししました。

「あッ」

蓋はまさに三寸ほども口を開いたのです。素早く左手を働かせて、その隙間に短かい棒を挟んだ平次は、同じ作業を幾度か繰り返しているうちに、とうとう一番長い一尺五寸の棒を唐櫃と石の蓋の間の突っかい棒にし、人間が上半身を入れて、楽々と千両箱を取出せるほどの大きな口を開けさせてしまったのです。

「ここへ弥惣が首を入れた。弥惣ほどの者も唐櫃の中の小判に眼がくれて、突っかい棒に附いている真田紐などには気が付かなかった」

そう言いながら平次は、手頃の空箱を一つ、唐櫃の蓋の間に挟み、

「腕げしゅにんづくでは、弥惣をどうすることもできなかつた下手人は、後ろからチョイ

とこの紐を引いた」

言葉と共につつかい棒の紐を引くと、

「あッ」

ガラッ八も、佐吉も、佐吉の子分も思わず声をあげました。突っかい棒は苦もなく取れて、百貫近い石の蓋が落ちると、間に挟んだ木の小箱は、微塵みじんに碎くだかれてしまったのです。

「それをやったのは誰だ、銭形の」

鎌倉河岸の佐吉は詰め寄ります。

「そこまでは考えなかったよ。——下手人はこれから捜すんだが」

平次は深々と腕を組みました。赤い夕陽が土蔵の中へ長々と這って、まだ拭き清めもせぬ血潮の跡を不気味に照らします。

それからガラツ八と佐吉は、下っ引を動員して調べ抜きましたが、弥惣をいちばん邪魔にしていそうな若主人の藤吉は、その晩持病の腹痛を起して、按摩の喜の市と婆やお浅が夜っぴて看病し、夜が明けて少し気分がよくなったところで小僧の定吉に蔵の鍵を出してやったり、弥惣の死骸を見せられてすっかり腹痛を忘れてしまったり、完全無欠な現場不在証明を持っていることが判りました。

こんな騒ぎがあったと知ったら、石の蓋の下へ、骨を折って懐中煙草入を差込む者もなかったでしょう。

日頃弥惣に虐げられ通していた、通い番頭の彦太郎は、何時もの通り同じ町内の自分の家へ帰って、娘を相手に一杯飲んで寝たつきりで、翌る朝まで眼も

覚めなかつたと知れて、これも疑いの圏外へ遠く逸それてしまいました。

「するといったい、誰が惣弥を殺したんだ」

ガラツ八が不平らしく言うのを、

「俺といっしょに来るがいい。毬栗いぐりは嚴重よろに鎧よろつていても、剥むきようがあるものだ」

平次は、その晩遅くなってから、八五郎といっしょに鍛冶町の裏の、ささやかな家の、番頭の彦太郎を訪ねたのです。

「どなた様でしょう？」

灯ろうを持って、入口に迎えた娘お筆の、朧ろうたけて美しいのを見ると、平次もさすがに二の足を踏みました。

「父さんは、いるかい」

「え」

「平次が来たと言ってくれ。——いや取次ぐまでもない、お前に少し訊きたいことがある」

「ハイ」

「この真田紐さなだひもはお父さんの前掛の紐だったそうだね」

「？」

平次の出した真田紐の不気味な謎が分らなかつたものか、お筆は大きい眼を見張りました。細面の大きい眼の、やさしい唇くちもとの、夢みるような美しさです。若主人の藤吉と弥惣の子の弥三郎との間に、激しい争いのあつたのも無理のないことでした。

「父さん、今晚は飲んでるかい」

「いえ、ちつとも」

「昨夜も飲まなかつたらう」

「え、——どうしてそんなことを」

「毎晩一合ずつ飲むのを楽しみに行っていることは、角の酒屋で聴いたが、昨夜と今晚は酒もうまくはなかつた筈だ」

お筆は何んと言つて取次いだものか、後ろの方を気にしながら、途方にくれて入口に坐つてしまいました。



「惣弥は悪いやつだ。お上でも調べは付いている、——紅屋へ入り込んで、主人や彦太郎を脅し、おど身上の半分くらいは横奪りしようとしたが、番頭の彦太郎が忠義者で、どうしてもうまく行かなかった。——そのうちに主人の藤兵衛が死んで若主人の藤吉が家督を継いだ。——藤兵衛の死んだのも、疑えば不思議なことばかりだった。——が訴えて惣弥を取押えるほどの証拠はなかった」

平次は上がりがまち框に腰をおろして、煙草入などを抜きながらこんな話を続けるのです。

「若主人の代になると、惣弥の倅の弥三郎が、道楽を教え込むのに骨を折ったが、若主人の藤吉はよくできた人間でどうしても悪い方に向かない。仕方がないから惣弥は、番頭の彦太郎を脅し——多分刃物くらいは持出したことだろう。とうとう土蔵へ案内させて、石の唐櫃まで開けさせた」

「まア、父さんが、そんなことを」

お筆は顔色を変えて立ちかけるのを、平次は静かに留めながら続けました。

「俺の言うことが違っているなら、お前の父さん、——紅屋の番頭彦太郎は、隣の部屋で黙って聴いてはいない筈だ。——いいか、何がどうあろうとも、人を殺して許されるわけではない。俺は踏込んで、父さんを縛って行くのはわけもないが、それではお上にも慈悲のかけようがない。言わば忠義のためにしたことだ。十手捕縄を預ってはいるが、俺にはどうも彦太郎が縛れない。——いいか俺は教えるわけじゃないが、岡っ引に縛られる前に、八丁堀の組屋敷へ駆け込んで、笹野新三郎様御役宅に自首して出るがいい。自首するとよくよくの罪でも御手加減がある。死罪が遠島、遠島が永牢ながろうで済まないとは限らない」

「——」

「ましてお前の父さんは、お主の家を思ってしたことだし、相手は凶状持だ。」

せいぜい遠島か所払い、極く極く軽いお裁きさばで済むかも知れない」

平次はそれが教えたかったのです。娘のお筆も前後の事情を察したもののか、ただもう泣き濡れて、顔を挙げる気力もありません。

「親分さん、有難うございます」

隣の部屋の彦太郎は泣き声で続けました。

「確かにこの私、——彦太郎が下手人に違いはありません。みすみすお主の仇と知りながら、訴えるほどの証拠もなく、腕かなずくでは叶いようのない私が、八千両の小判の隠し場所を教えなきや、娘をどうにかすると言われては、他に工夫も手段もございませんでした。私は心を鬼にしました。——娘を寝かして、そつと抜け出し、弥惣と約束して丑刻やつ(二時)丁度に蔵の前で落合って、あんなことになってしまったのでございます。銭形の親分さん」

弥惣の死

「どっこい、障子を開けちゃならねエ。お前の顔を見ると俺は縛らずには帰ら

れないことになる。——そのまま裏口から、八丁堀へ駆け付けけるのだ。いいか」
平次はなおも続けるのでした。

「——間違つても、俺の指図だなんて言うな。分つたか」

「親分さん、心残りは、——この娘、お筆のことでございます」

「心配するな。お筆は俺が引受けて、年内には紅屋に嫁入りさせてやる」

「有難い、親分さん。それじゃ、お頼み申します」

「あれ、父さん、私も」

お筆はあわてて父の跡を追いましたが、その顫える肩は裏口に待機していた八五郎に押えられて、父親の彦太郎だけが、後ろを見返り見返り路地の外へ遠ざかって行きます。

×

×

その後のことは言うまでもありません。死んだ弥惣は稀代きだいの悪党と知れた上、

彦太郎の主家を思う衷情が知れて、昔のお裁きの極端な融通性を發揮し、形ばかりの遠島で二年目には江戸に還れました。

その間にお筆は、平次が親元になつて、紅屋に嫁入りし、煙草入細工をして、藤吉を陥れようとした弥惣の伴弥三郎は、他の悪事まで露見して、どこともなく逐電しました。

一件が落着してから、ガラツ八がいつもの調子で絵解きをせがむと、

「何んでもないよ。——提灯の蠟燭が燃え尽くさずに消してあつたと聴いた時から、俺は番頭が怪しいと思つたよ。そんな切羽つまつた時にも火の用心を忘れないのは、よく気の付く女房か、賢い番頭に限ることさ。でも鍵を忘れたり、棒に附けた真田紐を解かずに、そのまま逃げ出したところはやはり素人だね。弥惣に脅かされて、よくよく思い詰めたんだらう」

平次はこう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十六年十一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

弥惣の死



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>